

---

# 森の中の別世界

灼眼龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

森の中の別世界

### 【Nコード】

N5153K

### 【作者名】

灼眼龍

### 【あらすじ】

主人公はごく普通の、強いて言えば最近遅刻気味の高校2年生の神崎雄二。

雄二が通う学校に転校生が2人来る。

夜の神崎家に突然の訪問者。

それは今朝の転校生2人。

雄二は2人から「影」と言う存在を教えられ、「影」と戦えと言われる。

雄二はいやがるものの半ば無理矢理、神崎家の裏の森へ連れてかれるが森の中に入るとそこは別世界に続いていた。  
その、別世界で雄二は戦うことになる・・・

(1) (前書き)

始めて書き始めた小説なので、柔らかめな見かたをしてくださいね  
^^

(1)

6月2日午前7時56分。

俺の部屋に目ざまし時計の音が響き渡る。

「うるせえなあ・・・」

俺は目覚ましを止める。が、すぐになり出す。すぐ起きれない俺には迷惑なスヌーズ機能と言うやつだ。

「あー、もうなんだよッ！って、あっ！やべえ遅刻だ！」

俺の名前は神崎雄二。まあごく普通の、強いて言えば最近遅刻気味の普通の高校2年生だ。

そして、俺の日常は今日を境に歪んでいく。

「お母あ！弁当はー？」

しーん・・・

あっ！そうだ。家には誰も居ないんだった。

コンビニで昼飯を買うために財布を持って家を出る俺。

俺はこれから起こる非日常を知る予知は無かった。

同日午前8時26分。

「よっしやあ、セーフ！」

俺は教室に滑り込む。あれ？

いつもなら先生が「雄二！今日もギリギリだな！」とか言って来るはずなんだが。

とか思いつつ自分の席に座ると俺の後ろの席の人間でありこのクラスの中で一番テンションの高い国本圭介がいつものように話しかけてくる。

「よう。今日も遅刻か？」

いつ聞いても異常にテンションの高い声。

「今日は、道ばたのおばあさん助けてたんだよ！」

とか真顔で冗談を言う。

「お前良い所あるんだなあ。」

と鵜呑みにする圭介。まあ、こいつはバカだ。

「そんなことより知ってるか？」

声をいつもより小さくして（それでも十分大きい）耳打ちしてくる。

「何がだ？」

いきなりの問いに分かるはずもなく内容を聞こうとする。

「今日、転校生が来るんだよ。」

こいつの言うことは8割が嘘だ。今回の話も嘘だと思い「ふうん」とか言つて軽く聞き流した。

圭介と話すにも話題が無くなったので仕方なく読書を始めようと思つた時に教室のドアが開き担任の先生が入ってきた。

「みんな座れー。オイ圭介早く座れ。」

毎朝のように圭介は今のセリフを言われる。

みんなが席に座ると担任の先生は軽く咳払いをしてから話し始めた。

「えー。今日は転校生が2人居るぞ。男子喜べ！二人とも女子だ。

入ってきていいぞ。」

クラス全員の視線がドアに集まる。

教室に入ってきたのは、銀髪（！？）のポニーテール美少女！・・・と茶髪のショートヘア小学生？

クラス全員（主に男子）は歓声を上げた者も居れば、語尾がどうしても疑問系になつてしまふ者も居る。

そりゃそうだろ、一人目の美少女は良いとして次に入ってきた小学生には誰もが目を丸くした。

いや、でも二人ともなかなかの美少女だ。

「じゃあ、自己紹介してくれな。」

先生が二人に向かつて言うとな最初に小学生の方が自己紹介し始めた。

「うちの名前は哭宮久実（くみやくみ）だ！特別にクミと呼んで良いぞお前等！」

イラッ。いや、俺だけじゃないこのクラスの約9割以上の生徒が同

じ気持ちのはずだ。

小学生体型でしかもかなりのロリ声に言われたら苛立ちは半減どころか倍増だ。

まあ、一部の生徒は癒されてるが・・・

ほとんどの生徒はこの苛立ちを鎮めてくれと言わんばかり視線をもう一人の美少女転校生に向ける。

「コラッ！無視するな！」

君は黙ってなさい。あり得ないほどの生徒達の以心伝心で呆気なくスルーされた小学生転校生、クミ。

美少女転校生は無表情のままクミの頭を撫でている。撫でている頭を見て始めて気づいたがクミに頭には何か乗っている・・・いや生えている？ぴよんぴよんしたものか。ああ、髪の毛か、アホ毛と言う奴だ始めて見たとか思っている和美少女転校生は無表情のまま口を少しだけ開いて自己紹介を始めた。

「私の名前は哭宮久兔<sup>こくみやくう</sup>。クウと呼んでくれると嬉しい。クーでも可。これからよろしく。」

.....

いや、可愛いんだが何か変だ。表情が無い。そのせいか少し怖い。クミの時とは違う沈黙がクラスを包む。

「じゃあ、どの辺に座るか・・・？」

先生ナイス！あの気まずい沈黙をよく破ってくれた！みんなも多分同じ事を思っていたと思う。多分

「先生。私、あそこの席が良い。」

銀髪ポニーテール無表情美少女転校生哭宮クウが指さした席は。うん、分かるよね？この流れだもん。もちろん俺の隣の席だ。

一番前の席に座る俺はみんなからの殺気がすごくて振り向けなかった。

「クウがアレを選ぶならしょうがないなあ。じゃあ、うちはあそこがいいぞ！先生。」

クミが選んだのはクウとは反対側の俺の隣の席。そしてまた背後か

らとてつもない殺気。

まてまで、それより今俺のこと「アレ」って言わなかったか？

まあそんなことより・・・俺の両隣の席にはもう人が座ってるから！と言おうとした瞬間に先生が口を開いた。

「まあ、いいか。じゃあ小松、細山、席交換してやってくれ。お前等は後ろの席に座れ。」

「ウオイ！先生！あ・・・」

先生顔色悪いですよ？うん、分かります。俺の背後からの殺気を直視してしまってるんですもんね。

「とりあえず1時間目の用意しとけよな。」

そう言うと先生は逃げるように教室を出ていった。

そして刻々と時間は過ぎていき4時間目の終わりのチャイムが鳴った。俺は未だに後ろを振り向けない。振り向いたら絶対、死ぬ。

昼食の時間になった。まあ、予想どおり。

「オイ。雄二。（怒）」

声だけで怒ってるって分かりますよ。圭介君。って言うかそんなに肩を強く掴まないで下さい、痛いです。怖いです。（泣）

「何だよ。とりあえず離せっ！」

圭介の手を振り払いながら後ろを向く。向いてしまった。が今は昼食中だった為みんなは中庭なり屋上なりに行つてて教室にはほとんど生徒が居なかった。結論、気絶しなくてすんだ。

安心して胸をなで下ろす暇もなくすぐさま圭介に質問された。

「何でだ？」

なぜか少し悲しそうな表情で問いかけてくる。これがあの転校生のどっちかだったらたまらなく可愛いんだろうとか考えながら

「知らん。マジで。」

圭介に真剣な顔を作つて言う。すると圭介はいきなり泣き出した。いや、マジ泣きかよ。

「何で、お前だけそんな、あんな美少女に挟まれて、畜生畜生畜生畜生・・・」



俺はどうすればいいか分からなかったがとりあえず効果がないのを承知で圭介にこう声をかけた。

「お前、俺の後ろなんだから転校生とは俺と同じくらい近いんじゃないか？」

号泣していた圭介の泣き声が止まり俺の方にキラキラした目で見つめてきた。うん。キモイ。

「そうだな。近いな！手を伸ばせば触れるな！」

こいつの事だ。多分マジでやるだろう。いや、絶対やる。

「触るなどは言わないが、訴えられないような箇所にしるよ。まあ、小学生体型の方はどこ触っても訴えそうだが。」

一樣忠告する。忠告してすぐにどこかで俺を呼ぶ声が聞こえた。様な気がした。

「きのうせいか・・・」

つい声に出して言ってしまった。まあ、独り言だ。

「神崎雄二！呼んでるんだから返事ぐらいしろ！」

今度は完全に聞こえた。塚、近い。声でかい。声のする方を向くとそこにはアホ毛をびよんぴよんさせた転校生のクミとクウ（クーでも可らしい）が居た。先に言っておくがこの時点で既に俺の後ろの席からは殺気が感じられた。

次のクミの一言でその殺気が具現化した。

「放課後一緒に帰るから掃除が終わったら教室にのこってる！」

後頭部を思いつきりぶん殴られた。痛いです。はい

「痛つてえな。なんだよ！」

言われる事は分かっているが他に言うことがないので圭介に問うと

「やっぱり知り合いなんじゃねえかよ！お前みたいな奴にあんな美少女がいきなり一緒に帰ろう何て言う分けないだろ。」

お前みたいな奴？あ、もしかして喧嘩売られてるのか俺。いいや、めんどくさいし。

「いや本当にこいつ等がいきなり・・・あれ？」

振り返るとさつきまでいた転校生二人が居ない。ほんのちよつと前まで居たのにな。

キーンコーンカーンコーン

昼食時間終了のチャイムが鳴った。・・・・・・昼食？

「食ってねえ！コンビニでわざわざ買った弁当食ってねえ！つてお前もだよな圭介。」

昼食時間中ずつと話してた圭介はもちろん俺と同じで食ってないはずなんだが。

「何が？俺弁当食つたよ？」

弁当箱を片付けながら平然と言う。

マジですか。いつ食べたんですか？つて言うかさつきのイライラはどこに行つたんですか。

昼飯を食べなかつたせいで5、6時間目は全然集中出来なかつた。

まあ、背後からの殺気も原因の1つだが。

で、掃除の時間も過ぎ帰りのホームルームの時間だ。圭介はあれ以降得に俺と転校生達の関係をしつこく聞いてくることはなかった。

そろそろ、ホームルームも終わる頃に俺は彼女達と2対1で会つのがなんだか緊張してきた。まあ、普通そうだろうな。最近遅刻気味な男子が美少女2人に呼び出される何て事無いもんな普通。普通じやなくても無いよなきつと。

「なあ、圭介。今日放課後暇だろ？」

分かり切つたことを聞く。まあ、確認だ。

「あ、ゴメン！今日は少し隣のクラスの女子に呼ばれててさ。」

何ニヤニヤしてんの？つても気持ち悪いし別に羨ましくないけど。「転校生に呼ばれたから行くんだけど。お前が忙しいんだったらいいや。他の人誘うわ。」

「あ、そう言えば俺今日超暇だわー。しょうがないから行ってやるよ。」

即答、隣のクラスの女子は？どうすんですか？

俺は、その疑問を抱きながらも口にはせずに、放課後に一緒に残る約束をした。

「なあ、俺もう帰って良いか？」

俺はついにこの言葉を発してしまった。

只今、午後5時38分。掃除なんかとつくに終わりそろそろ部活も終わり校長先生が見回りに来る時間だ。

「バカかお前！あんな美少女との約束を破るのか？俺が許さんぞ！」「なんだか知らないが俺は圭介に怒られた。

二人で話していると、そこに一人の男性が来た。

「こんな時間まで何してるんですか？早く帰りなさい。」

ついに、校長先生が来てしまったのだ。しょうがなく、俺と圭介は下駄箱へ向かうそのまま何もなく圭介とは別れてそれぞれの家へと帰る。

(1) (後書き)

読んでいただきありがとうございます。  
続きもすぐにつづきますのでそちらも読んでいただけると嬉しいです。

自分の家の前に着いた。100段びつたりある階段を上り始める。俺の家は神社だ。500年以上前からあるらしいが。俺は知りたくもない。まあ、とにかく俺の家には「何とかの井戸」とか「何とかの樹」とか「何とかの池」みたいなものがある。

俺は別に自分の家が嫌いな訳じゃないが、家の裏にある森は大ッ嫌いだ。どこまで続いているかさえ分からない気味の悪い森だ。誰も入ったことはないし。親にも何故か入るなと言われている。今日もその森は気持ち悪いほどに静かで闇に包まれていた。

「相変わらず気持ち悪いな」

毎日のように言ってしまう一言。玄関に着き鍵を開けて中に入る。

「ただいまあ！つて誰も居ないか・・・」

親と妹は海外に旅行だそうだ。俺は自分から行かないと言った。行つてられるか。めんどくさい。家に居た方が自由じゃないか。

「腹減った。」

冷蔵庫を開けると空だ。はあ とため息が3回くらいで出る。

「まあいいか。少し早いけど寝るか。」

時間は8時48分。学校の帰りにコンビニで立ち読みをしていたらこんな時間になった。

寝ようとして自分の部屋行き、電気を消して布団に入る。

それなりに睡魔が俺を誘う頃にそれは起きた。

バンバンバンバンバン

「え？何？うわああああ！」

手。窓を手が叩いている。手だけが・・・

月明かりで黒いシルエツトとなった手が俺の部屋の窓をバンバン叩いている。

慌てて電気を付けると黒いシルエツトだった手が肌色に変わりこの世の物だと安心する。いや、まだ安心は出来ないが。次の出来事で安心を通り越して疑問が生まれる。

「さっさと開ける！ボケツ！」

この声には聞き覚えがある。学校を俺への殺意で満たした声だ。

鍵を外し窓を開けると　ぴこぴこ　とアホ毛が苛立っていた。クミだ。クーも居る。

「開けるの遅いんだけど」

啞然とした。学校では無表情で言葉は必要最低限しか使わないクーが、今は不機嫌そうな顔をして文句を言ってきたのだ。

「あ、すいません」

びっくりしすぎて敬語になってしまふ俺。

クミはニヤニヤしてる。いらつく、ニヤニヤするなっ！

「入って良い？」

クー様はまだ不機嫌なようだ。

「あ、どうぞどうぞ」

俺はクーが怖くなった。昼間の無表情なクーもある意味怖いけど、今のクーは普通に怖い。

昼間のクーが表なのか？今のクーが表なのか？とか考えながら2人を窓から入れると、クミのアホ毛が　ぴよこんっ　と動く。

まあ、あらかた予想はできてる。俺はこれでも掃除好きだ。今のアホ毛の動きは俺の部屋が意外と綺麗でびっくりしたのだろうと俺は推測した。

「きつ、汚い部屋ね！」

「顔引きつってるぞ？」

俺はクミの顔を軽くペチペチと叩く。

「気安く触るんじゃないわよっ！このエロ豚があっ！」

クミが赤面して叫んだと思ったら、俺は足払いをつけてすっ転んだ所をサソリ固めされた。クーに。

もう、意味がわからん・・・

「ちょっと、痛いからマジでっ」

ギブサインとして床をバンバン叩くさつき窓を叩いていたクミのよ  
うに。

「ねえ、喉乾いたー」

クミが椅子でクルクルしながら言ってくる。

サソリ固めされたままの俺に対して言う言葉かつ！内心で叫んだ。

「喉乾いたんだっいたら、飲み物持ってきてやるから・・・」

次の言葉が出ない。

「何？どうして欲しいの？」

クミはニヤニヤしながら椅子を降りて俺の顔の前にしゃがみ込む。

「たっ、助けてくれっ！」

クミは満足げな顔をしてクーに顔を向けて、クーとアイコンタクト  
を取るだけで俺はサソリ固めから解放された。

全身が痛い。

「で、何でも良いのか？」

俺は聞くとクミはまた椅子でクルクル、クーは勝手に俺の部屋のマ  
ンガを読みながら、各自、飲みたいものを言ってきた。

「うちはコーヒーが良い！出来ればブラックでっ」

以外だ。体型上オレンジジュースとか言うのかと思った。

「分かった。で、クーさんは何が良いんだ？」

敬語とタメ語が混ざったような質問の仕方を見るとクーは即座に答  
えた。

「オレンジジュースが良いっ！」

ダメだ。この子は不思議すぎる。そんなことより問題が1つ。

「家にコーヒーはあるけどオレンジジュースは無いぞ。」

「買ってくれば良い。」

即答っ。素晴らしいほどに即答。

「俺が買いに行くのか？お前等は？」

人の家で待つてるとか言うなよ？と願いつつ聞いてみる。

「待つてる」「」

はあ・・・

俺は最近ため息が多いと今になって思う。

そして、これから多くなることも嫌々ながら感じていた。

「じゃあ、買って来るから大人しくしてろよ。」

俺は家を出る。

大人しくしてろ。と言っしてしてる奴らではないよな・・・

と、思いながらまた、ため息が出る。

俺は夜風に当たりながら1つの疑問を持つ。

「クミはあんなにクルクルしてて気持ち悪くならないのだろうか。」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5153k/>

---

森の中の別世界

2010年12月5日01時24分発行